

沢庵のしっぽ

中村武志

著者略歴

中村武志、国鉄職員、四十五歳。
 ○明治四十五年一月十五日長野県に生る。○現在国有鉄道本庁厚生局厚生課に勤務す。○著書に「埋草隨筆」(昭和二十六年十月刊私家版)、「目白三平」(昭和二十九年九月刊光文社)あり。

沢庵のしつぽ

昭和二十九年十月十日 印刷
 昭和二十九年十月十五日 初版発行

定価 一四〇円

著者 中村武志なかむら たけし

発行者 松本國雄
 東京都中央区新富町二ノ二

印刷者 草刈親雄
 東京都新宿区市ヶ谷台町一

発兌 株式会社 四季社
 東京都中央区新富町二ノ二

電話築地(55)二六三四番
 振替口座東京二〇一九三番

(落丁・乱丁等の場合は本社にてお取替いたします。)

沢庵のしつぽ

中村武志



四季新書

沢庵のしつぽ・目次

目白三平の生活と意見	五
駈け出し掬摸	四
ナミさん	四
七宝堂随筆	三
薄利堂の御本拝見	三
筆跡鑑定	五
図書目録	三
宝くじ	四
朝の散歩	六
七月三十日の喧嘩	六
社長の電話	七〇

片道 麿	七
近い将来	七
下戸の晩酌	六
沢庵のしつぽ	六
隣の筍	八
子供の誕生日	八
著者多忙	六
掘立小屋の百閒先生	九
ダンス騒動	二〇
ネクタイの箱	一五
目白三平言行録	一五

目白三平の生活と意見

電信電話公社に借金をすること

国鉄本庁校正局校正課一級課員の目白三平の上衣の内ポケットには、小さなメモの手帖がはいつてゐる。一頁を一週間に区切つて目附が印刷してあるが、毎月のように五日と二十日の前日或いは前々日、即ち四日とか三日とか、十九日とか十八日のところには、山部氏から五百円、熊本氏から三百円というような書き入れがしてある。彼の勤先では、月給が五日と二十日の二回払いなので、その二三日前になると、彼はきまつて上役や同僚に借金するのである。そのほかに、ところどころに電話一回借金というメモがしてある。これは目白三平が電信電話公社から、無断で電話料金五円を借用した証拠である。

目白三平は、街頭の公衆電話を使用して五円玉の持合せがない場合、十円玉を入れるというような気前のいいことは決してしない。無断で借金してしまう。そして手帖に記録しておき、次の機会と一緒に返済するのである。ところで、次の機会というのが、二月も三月も後になる場合があるのだから、その間に電信電話公社で、公衆電話料金の収入状態を調べて、料金未収入五十三％という統計が出たとすると、目白三平の手帖のメモには何のかかわりもなく、その中には彼も含まれてしまうわけである。

目白三平が、公衆電話のボックスの前で順番を待ちながら、手帖を繰っているのを見たら、それは電話番号を調べると同時に、たいていは電信電話公社の借金の有無を確かめているのだと考えていい。

目白三平は五円玉を持ち合わせていない時には、電話料の代りに映画の入場券の切れ端とか、ポケットにたまつた煙草の粉などを料金箱の中に入れる。とにかく恰好だけは五円玉を入れたように見せかける。後に待つている人が、彼の手許に注意していて、金を入れなかつたなと考えるのは止むを得ないけれど、あの男が入れないなら俺も入れないでおこうなどと、電話料金の不払を奨励する結果になつては申訳がない。

電話料金集金係が、国電目白駅前の公衆電話の料金箱から映画の入場券の切れ端を発見し

たら、それは間違いなく目白三平が入れたものと判断してよいだろう。ただし、料金箱の底にうつすらとたまっている、あるかなきかの煙草の粉の場合は、いかに爛眼けいがんの集金係といえども気がつかぬにちがいない。

それにしても、ポケットに煙草を入れて歩くとなぜ粉がたまるのだろうか。

それは目白三平の解釈によると、煙草専売法第六十二条で「公社は、農業の製造の用に供する目的その他の目的に充てるため、葉たばこ、製造たばこ若しくは製造たばこのくずを売り渡すことが出来る」ということになつてはいるが、農業用駆虫薬の原料以外には、屑煙草は全然売り渡されてはいないらしいので、葉煙草の運搬中やシガレットの製造過程に出来る屑煙草は、殆んどがシガレットの中に巻き込まれてしまうと云うのである。その粉が目白三平の上衣のポケットにたまり、時々五円玉の一時の身代りとなつて、公衆電話の料金箱に入れられる結果になるのである。

ついでのこと、公衆電話を利用される人々に、目白三平は彼自身の苦い経験にしたがつて、是非とも忠告したいことが一つある。それは、公衆電話のボックスが二つ並んでいる場合、どちらを選択すべきかということについてであるが、たいていの人は、ただ漫然とボックスの前に並んでいる人の数を勘定して、少い方の列の後につくにちがいない。しかし、こ

れは飛んでもない軽薄な判断である。

目白三平も実ははじめはそのような選択方法を取つたのであつて、その時は片方のボックスには男ばかり六人、他の方は五人だつたが、一番後は十八、九歳の女の子であつた。彼はその女の子の後に並んだのである。

どちらのボックスも四人までは同じ速度で順調に進んで行つたが、五人目の女の子になつたら、いつまで経つても話が終らない。お隣りでは、目白三平よりずっと後から来た人が、次から次と電話をかけて歸つて行く。彼はじりじりしながら女の子の話を聞いていた。女の子の話というのは次のような至極他愛ないものである。

「さきほどは失礼、あなた真直ぐにお歸りになつて？ ええ、別に用事はないんだけど、急にあなたのお声が聞きたくなつたのよ。あの生地をお母様にお見せになつた？ 何て云つたの？ だつてそう派手じゃないわ。去年のことを考えたら地味過ぎる位よ。じゃああれを買つたら、お母様はもつと驚いたでしょうね。あれつてあれよ。あの三番目に見たあれよ。そうそう、あのあれよ。……お兄様は？ やつぱりお兄様は分るのね。時代の相違よ。……あなたのお声聞いたら急にお逢いしたくなつたわ。今日は私んちへ来ない？ 叔父様からいただいたケーキがあるの。すぐいらつしやいね。……ところでこの叔父様は私が好きらしいの。

私の手をそつと握つて、何か買つてやろうつて云うのよ。えつ？ 年は丁度四十よ。年なんかどうだつていいじゃないの。私、うんと色々買つて貰うわ……」

逢う約束をしてからも、女の子の話はいつまでもだらだらと続いている。目白三平は地団駄を踏んでいらだつている。その様子を見て取つて、彼の後に並んでいた五十年輩の紳士が、彼を慰めるようにゆつたりしたひどく鷹揚おろような口調で云つた。

「女の子の話は長いすな」

「全くです。用事はないが、声が聞きたいとは何事です。幾人も待たせておいて、怪しからんですよ」

目白三平は、紳士に喰つてかかるような口調で云つた。

「まあ、まあ、今に済みますよ」

「それに、これから逢いましょうと約束してから、いつまでもしやべつてゐるのは、どういふわけですかね。逢つてから話すことが無くなるでしょう」

「いや、女にはいくらでも話がありますよ。一年中で女が一番しやべらないのは二月だということを御存じですか」

「知らないですね。どういふわけです」

「つまり、二月は二十八日しかないからですよ。女の饒舌を封じるためには、目を短くする以外に方法はありませんよ。……女の子にああいう無駄話が出来るのも、世の中が平和になつた証拠ですね。そう思つて我慢するよりほかはないですな。それに考えて見ると、顔は見なくてもいいが声を聞きたいというのは、電話の本質に最もかなつた利用法ですよ」

目白三平は、紳士の話を聞いているうちに、段々心が鎮まつて来た。しかし、その後彼は公衆電話を利用する場合、女の人が並んでいるボックスを敬遠して、少し位長くても男ばかりの列に並ぶことにしている。

近所の人には挨拶したくないこと

「お宅の御主人は、私に対して何か感情を害していらつしやるんでしょうか」

と云つて左隣りの青木さんの奥さんが、目白三平の細君に抗議したそうだが、彼は特別に青木さんの奥さんを嫌つてゐるのではない。

青木さんの奥さんは朝が早い。目白三平が出かける時は、きまつて青木家の前を掃除している。どちらの家にも垣根も塀もないのだから、青木さんの奥さんは、御自分の家の前を掃いてゐるうちに、段々境界の線をひろげて行き、ついでに目白家の前も掃除する結果にな

る。

青木さんの奥さんが、お尻をこちらに向けて、一生懸命掃除している時、目白三平は自分の方から声をかけて、朝の挨拶するのは面倒だし、たとえこちらを向いていても顔が合わないければ、彼は言葉を交さずに出かけてしまいたい。どんなにそつと出かけても、二間とは離れていないのだから、目白三平の気配を感じない筈はなく、彼が何か感情を害しているのではないか、と青木さんの奥さんが邪推するのも無理はない。

目白三平は、国鉄へ行くところかと云えば愛嬌のいい方である。誰に向つても彼は自分の方から朝の挨拶をする。彼はこれを仕事の一部と考えている。俺は国鉄本庁校正局校正課の一級課員だから、俺より地位の低い者は、先に俺に向つて挨拶しなければならぬなどとは毛頭考えていない。彼は、エレベーター運転係の青年にも、給仕君にも、廊下掃除係の小母さんにも、彼の方から朝の挨拶をする。

それから目白三平の仕事がはじまる。彼の仕事は、帳簿に数字を記入したり計算したりするものではなく、どちらかと云えば人を相手にする仕事である。あちらこちらから電話がかつて来る。また人が訪ねて来る。時候の挨拶をしたり、機嫌を損じないようにして、相手を説得しなければならぬ。こちらか訪ねて行つて嘆願する場合もある。

こうして朝の挨拶からはじまつた職場生活が終る頃になると、目白三平はしやべり疲れてすつかり人間嫌いになつてしまふ。せめて職場以外の場所、即ち家庭とか近所では、面倒臭い時には朝の挨拶やその他儀礼的なことは、かんべんして貰いたいものだというのが目白三平のいつわらぬ心境なのである。

こういう事情を青木さんの奥さんに説明するのは愈々面倒だし、また説明したところでよく納得して貰えないだろう。

日曜日の朝、目白三平の家へ、お向うの坂下さんの一人娘の杏子さんが遊びに来た。長男の春木君としばらく仲好く遊んでいたので、目白三平は蜜柑を三個杏子さんにやることにした。

目白三平が蜜柑をやろうとした時、春木君が、

「お父さん、ちよつと」

と云つて、彼の腕を取つて隣の部屋へ連れて行き、そつと囁いた。

「ねえ、お父さん、杏子さんの小母さんはいつも僕には一つしかくれないよ。そしてね、杏子さんは大きい蜜柑、僕は小さいんだよ。うちのお母さんはね、やつぱり一つだけれど、同じものを選ぶんだよ。だから三つは多いよ。損だよ。大きいのを一つでいいよ」

「まあ、いいじゃないか。折角出して来たんだから、たまには三つあげよう」

春木君はひどく不満そうであつた。

その夕方、目白三平は散歩に出かけた。道で遊んでいた春木君が、

「お父さん、パチンコだろう」

と声をかけた。

紙魚書房まで行つて見るつもりだつたが、彼は子供の暗示にかかつて、パチンコ屋にはいつてしまつた。十五個の玉が一つもはまらない。パチンコ屋を出たら、坂下さんの御主人にばつたり出会つた。

「今朝ほどはどうも有難う存じました」

と坂下さんが云つた。

「いえ、どういたしまして」

何のお礼か思い当らぬままに目白三平はそう答えたが、しばらく経つてから、今朝杏子さんに蜜柑をやつたことを思いだした。

翌日、目白三平が坂下さんに会つたら、

「昨日はどうも」と挨拶された。

その翌日は「一昨日はどうも……」と云われた。四、五日経つてから又「先日はどうも……」という挨拶を受けた。

それから半月ほど後の日曜日の午後、目白三平は一寸用事があつて家を出た。大通りに出ると、彼は向う側をこちらへやつて来る坂下さんと顔を合わせた。坂下さんは立ち止まつて、彼に向つて頭を下げた。もう蜜柑のお礼ではないだろうが、こちらに聞えないにも拘らず何か挨拶の言葉を述べ立てている。すつかり腐つてしまつた目白三平は止むなく立ち止り、六、七間向うの坂下さんに丁寧に礼を返した。

彼の後から来た中年の女の人が行き過ぎてから振り返り、変な顔をしてまじまじと目白三平の顔を覗き込んだ。この女の方は、道の向う側の坂下さんに気がつかなかつたのであろう。

喫殻が長くても贅沢ではないということ

目白三平は、財布の許すかぎりピースを愛用すべく、現在懸命の努力を続けている。

しかし、昭和二十六年七月十六日前後の三ヶ月間は、彼は余儀なく愛用のピースを止めて、新生を喫つていた。当時は彼の細君が病氣をしていたばかりでなく、親戚に冠婚葬祭がいくつも重なつて、お祝いや香奠の金を作るのに四苦八苦していたのである。

昭和二十六年七月十六日という日を、目白三平がどうして正確に覚えているかというところ、当日の朝日新聞の夕刊に、日本専売公社総裁秋山孝之輔氏と朝日新聞社記者との次のような一問一答が載っていたからである。

問 総裁は「新生」をのんでるそうだが……。

答 専ら生理的な理由からだ。「新生」は最も軽くてノドが傷まない。

日本専売公社総裁秋山孝之輔氏を訪問した帰途、若し朝日新聞社の記者が、国鉄本庁の八階八八号室に校正局校正課の一級課員目白三平を訪ねて同じ質問をしたら、彼は即座に次のように答えたにちがいない。

答 専ら経済的な理由からです。「新生」は安くて財布が傷みません。

目白三平は、新生でもピースでも、たいてい一本の12位まで喫えば、後は惜しげもなく捨ててしまう。この習慣については、国鉄の同僚、親しい友人はもちろん、彼の細君までが、身分不相応な贅沢な喫い方だと、口を揃えて非難するのである。

しかし、本当に煙草のうまいのは、12あたりまでで、後はただ惰性により、或いは捨てるのは勿体ないというケチな根性だけで喫うのであつて、真の喫煙を楽しんでいるのではない。